

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | R. Eucken: Sozialismus.                                                                                                                                                                                           |
| Sub Title        |                                                                                                                                                                                                                   |
| Author           | 阿部, 秀助                                                                                                                                                                                                            |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会                                                                                                                                                                                                          |
| Publication year | 1921                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.10 (1921. 10) ,p.1407(147)- 1408(148)                                                                                                                              |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 新刊紹介                                                                                                                                                                                                              |
| Genre            | Article                                                                                                                                                                                                           |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0147</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

會社の社員である個人の持分が、貨幣の一定分量である時には、これを彼等の“capitals”と呼ぶ。それからこれ等の持分の總體のものを、“the capital of the company”といふやうになつたのは、僅かな一步の差である。この一進展は、かゝる總體のものが、會社の活動の基礎となるものであるといふ事實——重要な會社のstockであること——によつて、一層容易に達せられた。さうしてこの間の事情については、一六九七年の英蘭銀行の法令にこれを窺ふことが出来る。第二十項は最初に common 及び principal との間に形容詞 capital を挿入し、會社の “common” capital, and “principal” stock と云ひ、然る後に同じものをいふ場合に the said capital stock の如くに common 及び principal を省いてゐる。茲に “common” なる言葉は各個人の capitals を總括する意味であり、“principal”

capital”は特定の stock の優れたることを示すものである。(原文には common がないから common capital and principal stock に於いて capital といふ言葉は、名詞であると考へられるかも知れない。然しながらこの解釋は capital stock といふ用ひ方によつて排斥せられる。さうして假令その説を認めるとしても、上述の議論には何等の變動は起らない。)

會社の經濟に就いて語る場合に capital と云へば、十七世紀の末葉以後には、二つの意味を有することゝなつたのである。一つの會社が設立せられ、株主が貨幣を用意したる時には、彼等は資本を用意したと云はれる。さうして斯かる貨幣が一度得られるならば、それは會社の “capital stock” 又は簡単に “the capital” なるものであり、利潤が豫期せられ、幾パーセントといふ配當が要求せられるのである。さうし

てそれは各社員又は株主の間に、その出資高に應じて按分せられるべきものである。(多くの會社の資本は株式になつてゐること、配當は株式の數に應じて行はれること、等を闕却してゐるのではない。この場合に於いても、實際は「何種の株式」といふことが書いてあり、十磅又は一磅の株式の所有者は、十磅または一磅の持分の所有者と全く同様の地位にあるのである。)

(未完)

## 新刊紹介

R. Eucken, Sozialismus  
(Philipp Reklam, U.B.)

レクラム叢書の一部である本書が世に公にせられたのは之れが著者たるオイケン教授が昨年エーナ大學を去りし前後のことであると思ふ、而して獨逸に於ける、理想主義の指導者たる著者が如何に社會主義を考察せしやを明かにするために、勢ひ之れが豫件として彼れが如何なる思想の懷抱者たるやを簡略に叙述する必要があると思ふ、恐らく彼れの哲學思想に於て誰人も承認する處はより高き精神界なるものが彼れの思想の中心をなせる點であると共に之れが研究的方法が經驗的自我に出發せずしそ大なる精神的綜合即ち生活系統に存することである即ち此内的全體主義の方面から彼れは社會主義其者の

意義内容を批判せんとするものである。

今著者其人の語る處を極めて概括的に考察するに、廣義に於ける社會主義が直接間接總ての國民の興味を惹起するが如き世界的意義を有するに至つたことは主として近代人が「全體」其者を重要視する中世主義より遠ざかつて現實主義の末に没頭するに至つたことである、換言すれば社會組織の統一的方面を無視し尊重せざりし結果茲に不安動搖の時代を齎らし、殊に此不安動搖時代の特徴が自我の物的享樂の方面に存することが著しく富の集積を必要とする結果、自から經濟上に於ける一大變動を來たし、一面には富の集積を齎らすと共に他の一面には富なき無産階級の出現となり、而して社會主義は後者の文化的要求として殊に其存在を價值付けらるゝに至つたのである、尙ほオイケン教授は社會主義其者を六つの方面より觀察して同主義は何れの點に於ても有力な問題に觸れてゐるが、然し人生問題としては何れの點より見るも未だ充分に解決せられないと共に其所論は餘りに偏篇を包含する。

唯物史觀の意義を誤解したり、或ひは哲學上の唯物論と混交して唯物史觀を攻撃する者の多い今日、此の研究に於ける我が學界の權威たる博士がマルクスの眞意を明快に紹介せらるゝことは素より學界に益すること極めて大なるものがあらう。又必要なことでもあらう。然し吾人の聞かんと欲するところは博士の是に對する批判である。

唯物史觀が必然論であるか如何か、又それが徹底すれば論理上一種の宿命主義とならないか如何かは、唯物史觀を攻撃する者の一つの論點となる。而して博士が云ふが如く、マルクスの唯物史觀中其の重要なものは人類の精神的文化に關する經濟的説明よりも、寧ろ社會組織の經濟的説明にある。(一七頁)即ち是は「更に二の部分から成り立つ。其の一は、社會の生産力と社會組織との間には密接不離の關係があるといふ事を主張したもので、其の二は、社會の生産力の變動に伴うて社會組織も亦必然的に變動すべ

狭き餘りに概括的で、餘りに黨派的で隨つて人間性の本質を誤解して單に吾人の生活の或方面に向つて其解答を與へしに過ぎずとなし、最後に著者はオスワルト、スペングラールと同じく義務と全體主義との必要を提唱せるのである。想ふに哲學的宗教的要求の漸次旺盛ならんとする我邦に於て本書の如きは何人も一讀するの價值ありと信するものである。(阿部生)

# 河上肇著「唯物史觀研究」

絶版 三三六頁  
定價貳圓八拾錢  
弘文堂發行

本書は博士が大正八年以後に書かれた唯物史觀に關する論文及び翻譯の大部分である。上篇は研究と題し、マルクスの唯物史觀に對する周到なる考證七篇よりなり、下篇は翻譯として、ボルハルト、ブーティン、グンテール、シュタウディンガー、エンゲルス等の唯物史觀に關する譯文五

篇を包含する。さういふ事を道破したものである。(一八頁)斯くして唯物史觀の必然論たることは疑を容れない。故に若し社會組織の變遷が全然自然科學的因果關係を以つて律せらるゝならば、シュタムラーの云ふ如く「因果上必然的な結果を促進せんとする願望は、一個の無用なるノンセンスを包含する。」博士は此の點に關する疑惑を一掃せんとかなり努力されて居るやうである。例へば「唯物史觀と必然論」「唯物史觀の要領」の大部分はそれである。然し其の前者に於ける論法の如き、スミス然りマルサス又必然論、マルクス獨り必然論であるのではないと云ふが如きは、論述の興味多きに比して説明さるゝところ僅少である。博士は云ふ「私の見る所によれば、……唯物史觀は、明かに一種の必然論であるが、其の必然論には、實は之が前提として、矢張り人間性に關する一定の獨斷があると思ふ。」(九〇頁)「マルクスも亦、人間性に關する或る觀察を前提として、一種の必然論たる唯物史觀を立てた。……しかるに必然論は常に